

ボールドウィンの女性達

前 川 裕 治

A Study of James Baldwin : Baldwin's Women

Yuji MAEKAWA

Abstract

This paper is an attempt to analyze how James Baldwin describes his women in his main novels: *Go Tell It on the Mountain*, *Another Country*, *Tell Me How Long the Train's Been Gone*, and *If Beale Street Could Talk*. Baldwin's men have been often discussed, because they were very important for him when he traced back his own history. His men sometimes appear as "father" and/or "homosexual." These men are so impressive that it could be said that we do not pay much attention to his women. In this paper, first of all, it will be discussed how Baldwin's women are involved with the process of recognition of being black slaves. Secondly, it will be analyzed how his women can get involved with today's problems through the recognition of being black slaves. Thirdly, the focus will be on the characteristics of his women and their potentiality.

I はじめに

James Baldwin と「男」とのつながりはとても深い。それは彼には *Go Tell It on the Mountain* のジョンと同じように、父親という姿をして絶えずのしかかっていたからである。その男の姿が *Giovanni's Room* では同性愛者になっていた。これ以降もボールドウィンにとって男性は彼の作品中重要な役割を演じてきた。読者である私達は、彼が女性をどのように描こうとしたのかとか、女性の登場人物に何を託そうとしたのかといった、彼の女性に対する扱い方等に興味を向けなかったといっても過言ではない。それだけ彼の男性に対する興味が強烈だったと言える。今手元にある O'Daniel (1977) の bibliography を見てもボールドウィンの女性に関するものは1つもない。ただ、同書の中に Orsagh による "Baldwin's Female Characters — A Step Forward?" が含まれているだけである。1977年以降おそらくいくつかは出版されているものと思うが、それでもあまり多くはなからう¹⁾。

1) 最近のものでは、Trudier Harris による *Black Woman in the Fiction of James Baldwin* (Univ. of Tennessee, 1985) があるが、残念ながら脱稿までに入手できなかった。

私の興味は、ポールドウィンの女性の登場人物の単発的な性格や役割にとどまるのではなく、彼の *Go Tell* よりはじめて、一貫して考え続けてきている過去の歴史を背負いつつ、現代に生きる中で、男性だけでなく女性がどのようにかかわっているのか、またかかわれるのか、またポールドウィンがかかわらせようとしているのかというところにある。

以下では、この過去の歴史を背負っているところから話をはじめ、それがいかに内実化されていき、現代の問題へと昇華されていくかということに解釈を加えつつ、女性のかかわり方を分析していく²⁾。

II 過去との葛藤

ポールドウィンは *The Amen Corner* の中で *Go Tell* を書いた頃の心境として自分は過去からののがれられなかったことを述べている。

I had not escaped myself, I had not escaped my antecedents,... (Baldwin 1968b: xiii)

彼にとって過去というものは何よりも切り離せないものであった。その中でも彼はよく父親との関係にこだわり続けた。父親は彼にとって大きな存在で、父を乗り越えていくことが彼の内なる闘いであったのだ。それが彼の最初の長編小説の *Go Tell* になっている。その中で彼はジョンという少年に自らを託すことで父親との闘いを演じさせた。これがポールドウィンの過去との闘いの1つのポーズなのである。

では過去との闘いとは何なのだろうか。次にそれを見ていくことにする。ジョンの場合、彼の生立ちが私生児であるというところに起因する。母エリザベスと前夫リチャードとの間にできたジョンは、父親リチャードの自殺によって父無し子としてこの世に生を受けることになった。これが彼の宿命の始まりだった。彼の課せられた役割は、私生児という境遇を通して黒人奴隷の歴史的境遇にいかになどり着くかというところにあった。黒人奴隷には父親は必要なく、ただ母親をしてこの世に生まれてきて、白人の主人の財産として肉体労働にあけくればよかた。彼のこの背負う過去の重圧は、自殺した父親も私生児だったということに加え、母親エリザベスの第二の夫になる義父ガブリエルも私生児であったことと、ガブリエルの父母は本当の奴隷の生活を経験してきているということで一層確かなものとしてジョンの肩にくだんでくる。

2) 取りあげる作品は *Go Tell It on the Mountain, Another Country, Tell Me How Long the Train's Been Gone* 及び *If Beale Street Could Talk* である。本論中、登場人物の描かれている作品名を記していない時もある。最後に各作品の主な登場人物の表をつけておいたので参照願いたい。

ボールドウィンはアメリカ黒人男性の状況について Nikki Giovanni という女流黒人詩人との対談の中で次のように述べている。

「アメリカでは黒人であることの代償は、黒人男性が支払わねばならなかった、支払うことになっている。そして出し抜かねばならなかった代償は、彼の性なんだ。黒人の男性はね、黒人であるが故に、男としての役割も、重荷も、義務も、喜びも根本的に拒まれているんだよ。同じようにきみの身体から生まれたぼくの子は、ぼくのものじゃなくて、主人のもので、即座に売りとばされ得る。こういった状況は、男の性的存在をむしろ壊してしまう。人の性的存在をむしろ壊していくと人を愛する能力を破壊してしまうんだよ。セックスと愛は別々のものであるにもかかわらず、そうなる。人の性的存在が失われると、彼の愛する可能性や希望も失われてしまう」(ボールドウィン、ジョバンニ 1973 (1977): 41-2)

黒人男の場合、もう1つ過去との闘いを余儀なくされていた。それは一人前の男として存在することを根本的に禁じられていたということである。上記のジョンの場合、母の連れ子とはいえ、長男でありながら義父ガブリエルに後継ぎ者として認めてもらえない。それに反して弟のロイは、自分よりはるかに敬虔でもないのに、父親に認められ、後継ぎと考えられていた。黒人の男が黒人であるが故に男として認められないということは *Tell Me How Long the Train's Been Gone* のレオの言葉をかりれば「不能」として扱われているということである。

...Jerry had been, at least insofar as this white girl [Barbara] and this white town were concerned, of my impotence (Baldwin 1968a: 215) (My underlines)

If Beale Street Could Talk にでてくるファニーという黒人青年は無実の罪で刑務所に入れられている。そのため妻になるはずのティッシュとはガラス越しにしか会うことができない。彼の不能状態は、彼の刑務所内での自慰行為を経て一層説得力を増すことになる。ファニーの父親フランクは、今までやっていた仕立屋の仕事もうまくいかない上に、息子のファニーの為に何も成すことができず、家族の中でも存在感の薄い人で、自ら無力感を日々募らせていって、最後にはファニーの釈放が絶望的だと分った夜、自殺してしまう。

このように黒人の男であることは、2つの大きな過去を背負っているということなのである。

次に黒人女の場合について考えてみると、同じように重い過去が背負わされていることが分る。彼女達の場合も2つの歴史的事実を使うことで歴史を背負っていることが示せる。その第一は、黒人男の場合と同じく、私生児であるということだ。ガブリエルと姉のフローレンスは父親が南部から北部に逃亡したということで私生児の境遇に追いやられたし、ジョンの母親も

私生児に近い生活環境で育っているし、ガブリエルの情事の相手のエスタも私生児である。第二は彼女達は私生児を生む宿命を担っていたということである。*Go Tell* ではガブリエルとフローレンスの母が奴隷女として生きたことが語られている。その部分を引用してみよう。

On this plantation she had grown up as one of the field workers, for she was very tall and strong; and by and by she had married and raised children, all of whom had been taken from her, one by sickness and two by auction; and one, whom she had not been allowed to call her own, had been raised in the master's house. when she was a woman grown, well past thirty as she reckoned it, with one husband buried — but the master had given her another.... (Baldwin 1953: 69-70) (My underlines)

黒人奴隷女の宿命は子供をできるだけ沢山生むことであり、その相手の男は問題ではなかったことが分る。こういったことは全て彼女達の白人の主人によって仕切られていたことを考えると、彼女達の私生児を生む宿命は、彼女達が白人達によって間接的に強姦されていたことに等しいといえることができる。(勿論直接強姦された場合も対象にのぼることになる) 実際フローレンスの母には、「わが子よばわりすることを禁じられた子」(上記引用のアンダーライン部分)がいたということは、白人の主人に生まれさせられた子のことで、彼女も白人の主人に強姦されていたことが分かる。最初のタイプはデボラが顕示的に体现している。彼女は16才の時白人の男達に輪姦された。その後彼女は子供のできない身体になり、本質的に女であることを抹殺されてしまうのである。また、ジョンの母親のエリザベスはジョンという私生児を生むことを選んだし、エスタという私生児は相手の男ガブリエルに認められないまま私生児ロイヤルを生むことで過去の重荷を背負い込むし、*If Beale* では、ティッシュという19才の女は、夫になるファニーが無実の罪でいつ釈放されるともなく刑務所に入れられているにもかかわらず今にも子供の生まれる身体をひきずっている。その子は私生児になる可能性がある。

男が男として存在することが根本的に損なわれていたように、いわゆる「強姦されている」ということは、女は女として存在すること、いわゆる「女性」がそこなわれているということである。上記したように、デボラは、子供のできない身体になっていることに加えて、ガブリエルという罪深い男の単なる肉欲と自己満足的な改心のポーズの道具としての役割をすることで成り下がらざるを得なかったし、エリザベスをして、同じくガブリエルという逆人種偏見を代表する男の自己満足のえじきになり、結局自らの苦悩を深める結果になっているし、エスタもただガブリエルへの憎悪だけを持って死ぬ運命にあり、女として、人間としての生活をおくることが許されなかった。

Ⅲ 存在の危機

黒人は過去の歴史を背負う中で根本的に人間として否定される存在であったといえる。彼らは自らの存在があぶない社会に住むことを余儀なくされていた、それがボールドウィンの黒人達に負わされていたことである。

自らの存在が否定されるということは、もしかしたら私達日本人の多くには、なかなか分かりにくい概念かもしれない。まずこの考え方を私達の問題として考えるところからスタートする。現実的なレベルで考えてみると、殺人者の家族、親戚であることに対する社会的評価と自分がそうである時の評価はどうであろうか。もう少し複雑なところでは、部落民であることへの社会的評価と本人がそうである時の気持ちはどうであろうか。もっと日常的に言えば、顔が悪いことへの社会的反応と自分がそうである場合の反応はどうか。こういうことを考えてみればいい。今あげた例は私達の社会の中では否定的評価を与える可能性が大きいであろうし、自分がそうである場合は自分を自分が否定するいわば自己否定に通じる可能性も大いに孕んでいるといえよう。

黒人達はこのように彼らを否定する社会の中で彼らが自らを否定する可能性を孕んでいたといえる。別ないい方をすれば、彼らの人間性を否定する社会の中で、彼らが自らをどのように認めていくか、どのように受け入れていくかという切迫した問題に直面していたといえる。

私生児のイメージを認められない存在に一般化するために *Go Tell* ではキリスト教の世界を題材として使っている。キリスト教の世界がいわば1つの社会を構成していて、表面的にはジョンがいかにか改心していきその社会に加わっていくか、受け入れられていくかということの描写である。私生児であるジョンも彼を生んだエリザベスも、改心できないでいるのは彼らの境遇を神が未だ許していない為だとガブリエルは主張する。いわば外側から否定するパターンである。この外側からの否定のパターンは黒人の歴史を見れば容易に理解できることであろう。彼らにとって彼等の住んできた社会は決して肯定的ではなかったからだ。

デボラは敬虔な女性で *Go Tell* で1つの社会の役割をしているキリスト教の世界では否定されるどころがなかった。しかし、彼女の場合はジョンやエリザベスとはちがって白人の男性によって輪姦されたということでもわりの人達から白い眼でみられるようになり否定されていく。

When men looked at Deborah they saw no further than her unlovely and violated body...
That night had robbed her of the right to be considered a woman. No man would approach her in honor because she was a living reproach, to herself and to all black woman and to all

black men.... Lust stirred in the eyes of men when they looked at Deborah, lust that could not be endured it was so impersonal, limiting communion to the area of her shame. (Baldwin 1953: 73-74)

黒人達にとってやっかいなのは、外側からの否定もさることもさることながら、自らの内側からの否定の声であった。まわりから、「おまえはだめなやつだ、だめなやつだ」と繰り返し言われ続けた時のことを考えてみよう。少なくとも「本当に自分はだめなやつかもしれない」と思いはじめるであろう。これがいわゆる自らが自らを否定するパターンである。ボールドウィンの男達はこの自らの内なる否定の声に悩まされる。まず *Go Tell* のジョンの例を考えてみる。彼は既述したように、義父ガブリエルから認めてもらえなかった。いわば外側から否定する声を身をもって体験していた。義父はいつも彼を悪魔の子とってののしった。土曜日の朝、母にいわれて掃除をしているジョンは自分の顔を鏡にうつして、義父のいつもいう自分を否定する言葉を繰り返すのであった。

His father had always said that his face was the face of Satan — and was there not something — in the lift of the eyebrow, in the way his rough hair formed a V on his brow — that bore witness to his father's words? In the eye there was a light that was not the light of Heaven, and the mouth trembled, lustful and lewd, to drink deep of the wines of Hell. He stared at his face as though it were, as indeed it soon appeared to be, the face of a stranger, a stranger who held secrets that John could never know. (Baldwin 1953: 27)

この例から彼の義父がいかにジョンを否定的に扱っていたかが分かるし、その義父の言葉に心を傷つけられて不安にかられ、もしかしたら自分は父のいう通りかもしれないと思いはじめて、自分で自分を傷つけそうになっているジョンの姿がよく分かる。次に *Another Country* のルーファスの例をとってみよう。彼にはレオナという白人の恋人がいたが、彼は彼女とつき合っていく中で、自己否定の傾向を強めていく。彼の自己否定への道はやや複雑である。ルーファスという黒人男は、はじめからあまり人種色の強い男ではなく、「彼はこういう世間のことやその憎悪と破壊の力を全然考慮にしていなかったことに気がついた」(Baldwin 1962: 27) 程である。しかし彼はレオナとの生活の中でこの世間の力をひしひしと感じ、彼の身体の中に染み込ませていくのであった。そこで彼の内には、こういった世間に反発する力が生まれてくる。彼はそして、世間に反発するのと同じ意味でレオナをたたきのめそうとする。ところがこのことは、彼にとってレオナとは一度は愛した女性であることから、自らをたたきのめすに近い意味を持っていた。彼は、こうして自己否定と自己容認の狭間に死を選ぶことになる。

外側からの否定の声に自己懐疑的になり自己否定の道を歩み出すのは、女性の場合も同じであろうか。答は否である。ポールドウィンの黒人女性は外側からの否定の声に屈することがない。

まずエリザベスだが、彼女は繰り返し行なうガブリエルの否定の声に耐え忍ぶ時があれば、きっぱりと彼にいいきることもあった。

“I know you ain't asking me to say I'm sorry I brought Johnny in the world. Is you?... And listen, Gabriel. I ain't going to let you *make* me sorry. Not you, nor nothing, nor nobody in this world...” (Baldwin 1953: 115)

デボラは、自分が犯した罪ではないにしても、白人達に輪姦されたが故にまわりから人間として扱ってもらえなかった。彼女の人格が否定された。彼女には、エリザベスのように、反発する相手が明確でなかったということもあったが、もし反発の態度をとるとしたら、「畑の淫らな行為を地でいく」(Baldwin 1953: 73) という方法もあったにもかかわらず、彼女はじつがまんをし、耐え忍んだ。彼女が耐え忍ぶ姿が最も決定的に示されるのは、彼女がガブリエルと結婚した後で、ガブリエルとエスタとの情事を知った時である。彼女はそのことを知りながら、自分自身におおいかぶさる恥辱を知りながら、ただ黙して、ガブリエルの行なうことをながめているだけだった。

彼女達に対して向けられた外側からの否定の声を物としなかった所以にここで触れておく必要がある。それは彼女達が共通して強いというところにある。上にはあげなかったが、フローレンスにしてもデボラもエリザベスも強固な意志の持主であることが彼女達の中に内なる否定の声をさせないののである。ではこの強い内面の遠因はどこにあるのであろうか。それは2つある。1つは歴史を彼女達が背負っているということである。女の苦しみとしての奴隷の歴史を耐えるということを通して体験しているということである。奴隷女にとって毎日忍耐の連続であったはずで、その忍耐の血が彼女達の中にも流れているからである。第二には、彼女達は男との仲を経ることで成長していたということだ。フローレンスはフランクというならず者を相手に10年近くも耐え忍んでいたし、エリザベスは気弱な理想主義者のリチャードをはげまして生きてきたし、デボラは身も知らぬ白人の男共の非道を経て、ガブリエルの利己的な生活の中で忍耐を学んできているのである。

IV 自由の問題

ルーファスのパラドクスは大切である。すなわちこれは、歴史を背負っている彼らが、その彼らを否定する社会の中で、彼らの中に自分で自分を否定する声が高まってくることを考えて

いる時分ることは、彼らが背負っている歴史を彼らのものとして受け入れていけばいく程、自らを否定する声が自らの中に高まってくる可能性を持っていることである。ルーファスは、人種偏見という意味で、白紙ではなかったにしても、レオナとの気持ちの中でそれは白紙に近いものであったことは既に示した。少なくとも彼の中には、人種偏見の眼は、潜在していたにしても、顕示的ではなかった。ところが彼の中には、彼女とつきあっていく内に「白ければ何でも憎む」という逆人種偏見の芽が育ってきているのである。レオナとの関係が抜き差しならぬところまできた時彼はどうにもこの逆人種偏見から抜け出せないところまできていたのである。彼の白人の友人のヴィヴァルドの、どうなってるんだという質問に対して彼は次のようにいう。

“I don't know, either. I don't know up from down. I don't know, what I'm doing no more.” (Baldwin 1962: 66)

人種偏見とは一般に白人が黒人を差別する時の言葉として使われるというイメージがあるので、その逆の「黒人が白人であればだれでも差別して考える」という意味で逆人種偏見という言葉を使った。

Go Tell のガブリエルは盲目的にただ白人を憎んでいたため、白人に時々好感を示すジョンが許せなかった。いたずら息子のロイが白人とけんかをして大けがをして帰ってきたことに関して、父はジョンにつきのようにいう。

“You see?... It was white folks, some of them white folks *you* like so much that tried to cut your brother's throat.” (Baldwin 1953: 45)

ガブリエルにとれば、白人は誰でも等しく憎悪の対象なのである。

Another のアイダも人種を極度に意識する存在であり、白人なら誰でも憎むというところがある。彼女は、恋人のヴィヴァルドがいくら彼女に近づこうとしても、彼が白人であるという理由から、胸襟を開こうとせず、ただ彼につらい思いをさせるだけであった。ヴィヴァルドはその時の苦しみをつぎのようにいう。

“What I've never understood... is that you always accuse me of making a thing about your color, of penalizing you. But you do the same thing. You always make me feel white....” (Baldwin 1962: 414)

ここで大切なことは、白人側からの人種偏見だけではなく黒人側も人種偏見にとらわれると

いうことをボールドウィンが描き出していることである。このことから分る彼の狙いは、自己否定とか自己容認の問題をさらに発展させ、1つの既成の価値基準にとられる人間の1つの傾向について取り組むことなのである。

ボールドウィンはかつてルーファスなどの逆人種偏見にとらわれている人達に対してとったのと同じ態度をライトとライトのビガー・トマスに対してとったことがあった。ボールドウィンは抗議小説の旗頭であったビガーの過激に反抗的で破壊的な性向がどうしても受け入れられなかったのだ。その時のボールドウィンの言葉を見てみよう。

For Bigger's tragedy is not that he is cold or black or hungry, not even that he is American, black; but that he has accepted a theology that denies him life, that he admits the possibility of his being sub-human and feels constrained, therefore, to battle for his humanity according to those brutal criteria bequeathed him at his birth. (Baldwin 1955: 17) (My underlines)

上記の引用で brutal criteria (アンダーラインのところ) という言葉に注意を払う必要がある。ボールドウィンの主張は、ビガーの行いは白人によって作りあげられた「過激な悪い黒人」という1つのパターンを実践しているもので、その既成の、しかも結局は黒人の品位を下げることに等しくなるパターンをそのまま演じているところに反対することである。

逆人種偏見という過激な形をとらない場合も同じことがいえる。例えば、*If Beale* のファニーの家族の場合を見てみよう。ファニーは無実の罪でつかまり刑務所に入っているが、彼の母親と姉二人は、白人の持つ「善良な黒人」という価値基準をそのまま受け入れているという点で、同じ部類に入れて考えることができる。彼女達のプロフィールは、この部類の黒人に入れる描き方がしてある。母親のアリスも姉のエイドリアンもシーラも色が白く長髪で熱心そうなキリスト教の信者である。これは、いわゆる南部の貴族の婦人のパターンである。知的であるということと熱心なキリスト教信者であることとは関連性のあることだし、裕福さともつながり、さらにこのことは彼女達の長髪ともつながってきている。姉二人はニューヨーク市立大の卒業ということも家庭の教育熱心さを物語らせるためのものである。こういった彼女達にかかわる描写1つ1つが彼女達の意識が中流階級或いは上流階級の黒人の代表であることを位置づけるためのものである。この範疇にはいる黒人へのボールドウィンの否定の態度は、母アリスや姉達が地方検事に連絡をとりファニーに不利になる証言を行なうことで最高潮に達する。

この1つの既成の価値基準にとられないということと、いわゆる「自由の問題」とを1つの問題としてとらえようとボールドウィンはしている。いわば肉体的に歴史的に拘束されてき

た黒人の被ってきた問題を単に人種の問題にのみとどめるのではなく、人間の考え方の面での「拘束」という方向に問題を昇華させようとする意図である。

ここでもう一度整理しておく、考え方の出発点としては、まわりから「だめだ、だめだ」と否定される中で、自分は本当にだめなのだと思ってしまうことがあるし、もう1つはそれに反発することによって自らを絶対視し相手を完全蔑視していくことである。反発や憎悪の方向性は異なっても、考え方のパターンは同じだと分かる。勿論この出発点の前に社会的人種偏見が存在していることはいままでのない。この偏見ともう1つのいわゆる「偏見」が考え方が拘束されているという意味で合致し、この拘束という意味がさらに発展し「奴隷には自由がない」という意味の「自由」と「既成の価値基準にとらわれている」という意味での「自由」と合致してくる。

ここまでくるとルーファスの苦しみは単なる人種的苦しみにとどまっていたのではないことが分かってくる。彼の苦しみは、黒人であるが故に自由でなかったという人種的苦しみと、既成の価値基準にとらわれていたが故に自由でないという二重の自由への苦しみを背負っていたのである。

従来の考え方にこだわって検証もしないままにその考え方を受け入れているということは黒人達に対して白人が行ってきたことだ。黒いということは黒人を否定し、社会から彼らを疎外する要点であり、こうすることが社会の1つの決まりであった。こういう人種の問題を考えていてボールドウィンがだどり着くのが、人間誰でも人種問題に見られるような考え方の凝固化、1つの考え方からなかなか抜け出せないといったことがあるということだった。こういう人種問題での考え方を出発点とする「考え方の自由」という問題を一般化させるための1つの題材として「同性愛」を使った。(Bone 1965: 233) こういった「考え方の自由」という問題を扱う場合、「同性愛」が適当かどうかについては後で若干ふれるので今ここではふれない。今の社会では「異性愛」を是として「同性愛」を否とする傾向が一般的である。そう考えるのが普通だと思われる。そのため同性愛は、既成の価値基準に反しているの、受け入れられにくいものである。これをいかに受け入れていくか、この問題に社会がどのように対処していくかがボールドウィンの狙いなのである。*Go Tell* ではジョンはエリシャに同性愛的なものを感じ、恐怖を抱いている。彼の問題は自分をいかに受け入れるかということであり、同性愛はそのプロセスの1つとして使われている。同性愛的な気持ちを持った自分を、やはり他の人と違って異常なのかもしれないという気持ちをジョンは持つ訳である。*Tell Me* のレオとバーバラは人種偏見に悩まされながらも二人の愛を成就できる一歩手前までいくが、それは達成されなかった。それは、クリストファーというレオの「真剣な男友達」が出てきたからであ

った。バーバラという女性は、パターンとしては *Another* のルーファス対レオナのレオナのような女性であるが、レオナより数段知的でリベラルであった。彼女は、作品に登場した時から、人種の壁はかなり乗越えていた。しかしそれでも彼女にボールドウィンが与える試練は厳しかった。試練とは、彼女が「同性愛」を許すかどうかという問題である。結局彼女はその線を越えることができず、レオとの愛を達成することができなかつた。彼女は一見自由な考え方をしているように見えても、結局のところ自由ではなかつたということになる。

「考え方が自由でない」という言い方は「ある1つの既成の価値基準から解放されていない」といえることができる。同じ意味だが次の問題を考える時、「解放されていない」という言い方の方がわかりやすい。すなわち解放されていなかった黒人奴隷の状況と、考え方のとりこになっている、すなわち解放されていない、今の人の状況とが重なりあってくることになる。黒人奴隷が解放されていなかった時の最大の問題が、解放されていなかったが故に、存在の問題であったように、解放されていない今の人の問題も、解放されていないが故に、存在の問題ということになる。両者共に存在、すなわち生きることが極めて困難な状況におかれている中で、いかに生きるかということが問われているのだといえる。

「解放されていない」という意味を実現するために *Another* では多くの登場人物がルーファスの亡霊にとりつかれることになる。ヴィヴァルドは、自分の生き方は本当のところはルーファスと同じように偏見という社会の既成の価値基準にとらわれていたのだと認識する。

Somewhere in his heart the black boy [Rufus] hated the white boy [Vivaldo] because he was white. Somewhere in his heart Vivaldo had feared and hated Rufus because he was black. (Baldwin 1962: 134)

ヴィヴァルドはアイダに対してもルーファスに対するのと同じく解放されない眼で彼女を見ていたといっている。ただ彼女に対しては、黒人を白人の自己満足の為に利用するという意味で見えていたということである。彼には、アイダへの愛する気持ちが強まれば強まる程、自分の彼女への気持ちが黒人を劣等に見ていたために愛したのではないかと思えてくるのだ。そう彼女を見ることによって自分の優越感をくすぐっていたのではと思うのであった。

And he thought, very unwillingly, that perhaps he did not love her [Ida]. Perhaps it was only because she was not white that he dared to bring her the offering of himself. Perhaps he had felt, somewhere, at the very bottom of himself, that she would not dare despise him.

(Baldwin 1962: 298)

アイダも唯一の信頼できる兄に死なれた後も、彼の為に復讐をすると誓い、兄の形見のカフスボタンを耳飾りにして、彼から離れないようにしている。

...when I decided that I ought to try to sing, I'd do it for Rufus, and then all the rest wouldn't matter. I would have settled the score. (Baldwin 1962: 419)

エリックの場合も、ヨーロッパを後にする最後の夜にもルーファスが彼の頭の中にてでくるし、アメリカに帰国後も何度もルーファスが彼の意識にのぼるのであった。

解放されていないということは、生きるうえでの難しさを伴うということである。たとえば上記の人達はルーファスという亡霊にとらわれていたため、時として身動きができなくなり、思いもかけない生き方をしなければならない。この生きる上での難しさという点では、現代社会も同じであるということから、「解放されていない」ということと現代の問題をつなげて考えることができる訳だ。つぎに現代社会での生きることの難しさについて考えていく。

現代社会で生きることの困難の根源をボールドウィンには、孤独の社会、愛の成立しない社会といったところに求めているとあっていい。たとえば *Another* の全体像を見てみると、この小説全体を支配している雰囲気は淋しさでありどうしようもない虚脱感であり、達成できない男女の愛である。脱力感にとりつかれている登場人物達はこのため皆同じ顔をしているので、主人公不在の小説といってもいい程である。彼らをこれ程までに追い込んでいくものは何かというと、彼らの立っている社会のつくりだす孤独感なのである。

久しぶりにアメリカに帰ってきたエリックはニューヨークの街に立つてつぎのようにニューヨークの孤独を描写する。

So superbly was it in the present that it seemed to have nothing to do with the passage of time: time might have dismissed it as thoroughly as it had dismissed Carthage and Pompeii. It seemed to have no sense whatever of the exigencies of human life: it was so familiar and so public that it became, at last the most despairingly private of cities. One was continually being jostled, yet longed, at the same time, for the sense of others, for a human touch: and if one was never — it was the general complaint — left alone in New York, one had, still, to fight very hard in order not to perish of loneliness. (Baldwin 1962: 230)

街が孤独だということは人も孤独だということである。そしてボールドウィンの場合、この人の孤独は男女の愛が成立しないことや人間同志のコミュニケーションの不足ということとむすびついてくる。

既成の価値基準のとりこになってそれから発展する志向のない場合、次の発展的ステップは期待することができない。ヴィヴァルドがそうであった。彼は自分は黒人と自由につき合えると思っていても、彼の心の中に潜在しているものは「相手が黒人だから友達になる」とか「相手が黒人だから恋人にする」という考え方であり、進歩派を自認する白人がよくとる態度である。これは考え方のパターンとしては「黒人だから否定する」というものと同じなのである。黒人という枠がないところに人間関係が成立するのが正常な訳だが、「黒人だから」という条件をつけて好感を示したり憎悪を示したりすることは1つの偏見のとりこになっているということによって解放されていないということになる。このヴィヴァルドは、ルーファスが無二の親友と思っていたが、ルーファスの亡霊とアイダの指摘により、自分がとりつかれていたことを認めしていく。それは自分には信頼できる友は本当はいなかったのだという孤独感の認識だったのだ。

アイダも同じことである。彼女はキャスに「この世の中で黒人の女というものがどんなものか、これはあんたにはわからないし、知る方法も、絶対ないのだ」(Baldwin 1962: 347)という。もしかしたら彼女のいう通りかもしれない。しかし問題は彼女がこの考え方にまったくとりつかれていたというところにある。彼女はそのため死んだ兄しか信頼することができず、結局孤独の中であえぐことになる。

考え方のとりこになっている人が他の人とのコミュニケーションに苦勞することを予想することはあまり難しいことではない。ボールドウィンは、コミュニケーションの成立の難しさを愛の達成の難しさという形で表現しようとしている。レオナを見てみよう。彼女は作品に登場した時から愛の達成ができない女として登場している。彼女がハーレムのバーでルーファスと出会った時は、既に南部のジョージアで結婚に失敗し、相手方に子供をとりあげられ、さらに子供のできない身体になっていた。また彼女は既成の価値基準にとらわれているというより、ヴィヴァルドをして彼女を Little Eva と呼ばしめる程何もしらなかった。彼女には、エリックが分析してみせたような孤独な混沌とした社会で生きていける程のたくましさはなく、ルーファスの複雑な自己否定の熱をさまさせる程の強さもなかった。純粹無垢な彼女はルーファスに対して、「ルーファス……黒いってことは何も悪いことじゃないわ」(Baldwin 1962: 52)としかいうことができないのである。

キャスはどうかであろうか。彼女もレオナと同じく社会のことが分かっていないという意味で不幸である。彼女は若くしてリチャードと結婚して二人の子供を生み充実した夫婦生活をおくっているように思えたが、彼女の考え方が未成熟な故に、二人の夫婦関係は長続きはしなかつ

た。彼女は、現実的な方向性を持ち毎日仕事にのみ明け暮れ彼女をかまってくれないリチャードにがまんできなくなる。そして彼女は「何ヶ月も前から、この家の私は幽霊みたいなものよ」(Baldwin 1962: 370)ということをはばからない。彼女は自分を中心になって、いつもまわりからみつめられていないとがまんできなかつたのである。こんな幼稚な面が彼女に残っていることは、現実主義になり、自分の本を売ることばかり考えている三文文士のリチャードには分かるはずがなかつた。彼は今でも自分は彼女を愛しているというが、その言葉も偽りに響く。二人はお互いに何も理解し合っていないからだ。

さらにキヤスは、満たされない気持ちをヴィヴァルドに求めていく。しかし彼は、アイダのことで頭がいっぱいで、彼女に伝えてくれなかつた。そこで彼女はエリックに期待を託した。エリックとの仲は成立したかに見えたが、実は彼は彼女に対して同情しか抱いていなかったし、彼にはイーヴという男友達がヨーロッパににいるということから、彼は基本的には Sexless であり、彼女の願いをかなえることはできなかつた。

バーバラとレオは最も愛の成立には積極的な登場人物である。彼らは二人が結ばれることで社会からくる抑圧の力も十分に心得ていたし、二人がいかにお互いを必要としているかということもよく知っていた。それでも二人は、いわゆるファンタジーの中でしか愛を達成することができない。すなわち、二人は work shop で働いていた頃の近くの人の来ない丘で一晩愛を確かめ合うことしかできないのである。

Orsagh は、*Another* では「満足できる男女の愛の関係はない」(Orsagh 1977: 66) といっているが、*Another* だけでなく *Tell Me* でも *Go Tell* でも *If Beale* でも同じことである。ボールドウィンの作品中、男女が充実感を、仮に困難を経てでも、得ることはないのである。

V ボールドウィンの女性達

今までボールドウィンの作家としての最大の問題であると思われる、過去を背負った者が現代社会の中に生きていくまでの解釈をしてきた。この中では特に意図的に女性の登場人物に焦点を絞って考え、説明してきたつもりで、過去から現在に至る経歴の中で、かなりの女性のかかわりの部分が明らかにできたと思う。最後に、多少重複する部分があるが、女性のかかわり方をまとめてみたい。

まず作品中の女性の特徴をみってみる。第一に先にもあげたように、彼女達は共通して忍耐強いといえる。デボラはその代表のような女性で、白人の輪姦に耐え抜いている。それにまわりの眼にも耐え、夫のガブリエルの不義にも耐えた。彼女の人生は「忍耐」一語につきる。レオナも同じである。彼女は前の夫や家族の愚行に耐え、子供との別離にも耐え、北部に来た後は一時的にルーファスとの幸せな時もあったが、ごくごく短い期間しか幸せは許されず、彼の暴

力を甘受し、最後まで彼を愛し続ける。

“I love him... I love him, I can't help it. No matter what he does to me. He's just lost and he beats me because he can't find nothing else to hit.” (Baldwin 1962: 59)

ティッシュ側の女性もきわめて忍耐強い。彼女達はいつ釈放されるとも分からないファニーの為に全てをささげている。ティッシュは身重の身体をおして毎日ファニーに面会に行っているし、彼女の母は老体をおして一人でプエルトリコまで証人を捜しに出かける。このように、ボールドウィンの女性は総じて忍耐強い。第二に、彼女達はきわめて活発で積極的で行動力があるといえる。今のティッシュの家族の行いを見ても、男達はファニーの為にせいぜい残業をしてわずかばかりの余分な金をかせぎ、ファニーの保釈金の一部にしようとするのが関の山であるのに対し、弁護士と折衝したり、ファニーの無実の証明の為に動きまわるのは女性だけである。*Go Tell* では、ジョンを主人公にした小説であるとはいえ、ジョンがどうしても乗り越える必要のある義父のガブリエルに積極的にかかわってくるのは女性である。彼の過去を告発する役割を演じている彼の姉のフローレンス、彼の肉欲におぼれる面と宗教色を出させるための役を演じるデボラ、彼の欺瞞な面を浮き彫りにする為に私生児を生んだエスタ、ジョンを守りガブリエルを越える手助けをするエリザベスといった具合である。*Another* でもアイダは絶えずヴィヴァルドに苦しみを与え、彼を振り回していたし、キャスのヴィヴァルドやエリックへの新しい愛を求めてとる行動も積極的だったといえる。*Tell Me* のバーバラとレオでは、彼女の方がレオに愛の告白を行っているし、パーティーに出ても彼女は絶えずレオをリードしていたし、work shop の仕事の後、レオの仕事のことで歌手兼ウエイターをしたらどうかとアドバイスするのも彼女である。このようにどの作品を見ても女性は男性をリードしている。第三には、活動的な彼女達は目的意識をはっきり持って行動しているといえる。エリザベスにしてもフローレンスにしても南部の苦しい生活からのがれて、何とか生活を変えたいというはっきりした目的意識を持って北部に移ってきている。ティッシュや彼女の母や姉の行動はファニーの無実証明という目的の為に行動なのであった。バーバラは女優になるという強い決意があったので家族の反対を押し切って、裕福な家族のもとからはなれ、一人で汚いアパートに住み努力しているのであった。アイダもルーファスの復讐を果たすという目的があったからこそ売春婦に身をおとし、虫ずが走る程嫌いなエリスという大演出家のいいなりにもなることができたのであった。第四に彼女達は信念を持ち自分に正直に生きようと努力する。その代表は何といってもバーバラである。彼女にはジェリーという白人の恋人がいたのだが、レオの中に自分をひきつける何かがあると感じるとジェリーに自分の気持ちを正直にいわずにはおれないので

ある。アイダは自分が信じていることに対して頑固なまでに正直でいようとする。彼女は誰に対してでも白人であれば、必ず攻撃的になり、白人の責任を追求しようとする。それが時には兄ルーファスの死を救えなかったことに対する非難であったりする。レオナが最後までルーファスを愛することができたのは、忍耐力に加えて、彼女が自分の気持ちを大切に続けようとしていたからである。彼女達には自分の信じていることに決して揺るぎをみせない正直さがあるのだ。

つぎに考えてみることは、特徴の1つに考えてもいいことだが、問題が彼女達のキャラクターには表面的にはかかわらず、ポールドウィンの女性を描く時の手法にポイントがある問題なので別個に扱うことにした。すなわちこれは、彼女達の心の闘いが男のそれと比べて迫力に欠けるということである。上記したように、女性を中心とした要素を各作品は含み、女性がリーダーシップをとって活動的に話の筋が展開されているにもかかわらず、彼女達の苦しみ、悲しみ、喜び、といった心の闘いが伝わってきにくい。その原因は女性の心にかかわる描き方に、男性と比べて異なるところがあるからである。それをつぎにみていく。まず第一に考えられることは、既述したように、彼女達の中に自己否定のプロセスがないというところにある。彼女達は自己否定の可能性を経ないですぐ自己容認に向かっている。この時の解釈を上では、彼女達の過去の歴史によって支えられた内面の強さと、男性遍歴の中での彼女達の精神的成長というところに自己否定のない遠因を求めた。この解釈はこれでいいのだが、それが為に不自然さが出てしまって、彼女達の生気が薄れていると思える。エリザベスやフローレンスは、自分の過去の歴史を体現していく中で強くなり、自己容認していく訳だが、そのプロセスでジョンが経験するような、自己否定の経験とか認識をほとんど持たなくて自己容認、すなわち自分の過去の歴史を受け入れていく。アイダの場合はもっとアンバランスである。彼女ははじめから自己容認のできた人として登場しているにもかかわらず、自分の過去の歴史を体験させられている。再認識のためと考えたにしても、それでもそこには自己否定に向かう可能性の描写が欠けている。私達の日常性に照らし合わせてみても、外側から自分が否定される中において、自己否定が心の内に生じないということは現実性に欠けているといわざるを得ない。第二は、彼女達は中心的登場人物でありながら、生い立ちとか成長過程といった、いわゆる今の彼女達をつくっている源にあたるどころの描写が薄弱である。別ないい方を、第一の根拠に合わせる形でいうと「唐突」だということになる。フローレンスやエリザベスの場合は、他の女性と比べれば、この唐突さはかなり避けられているが、それでも第一の根拠でいったように、自己否定の描写がないという意味では唐突さをまぬがれていない。アイダの場合もどうやってあれだけ強い信念を持ち得たのか読者に分かるようには描写されていない。この疑問は、ルーファスがレオナと

親しくなった頃の彼の人種的色彩の薄さと比べてみると増々深まる。兄妹でありながら、根源的なところで異なったキャラクターでスタートする根拠がどうしても納得できない。既述したように、バーバラは作品に登場した時は既にリベラルであり、人種的壁もかなりの程度で乗り越えていた。彼女のこのリベラルな面は彼女の家族の裕福さに反発するところに起因したのだろうということは、彼女が故意に貧相なアパートに住んでいることとか、作品の最後の頃描写される彼女の家族の者とレオとクリストファが会った時にとる彼女の家族の者より異なる人種問題への態度から想像できる。しかしそれにしても、そのリベラルなところに至る彼女の家族との葛藤の描写はなく、家族とはうまくいっていないとしか書かれていない。第三にいえることは、やはり「唐突さ」の範疇に入ることによって第二の根拠に通じることだが、彼女達は成熟しすぎていたり、逆に未成熟だったりする。特にこの傾向は白人の女性に顕著である。既に例として出したように、キャスにしてもレオナにしても、あまりに社会的なことに関して認識が足りない。レオナに至るところ、世の中に渦巻く人種的偏見の渦巻きに対してすら無頓着であるため、自分の白い膚が、またルーファスの黒い膚がどれ程苦悩を生み出し、どれ程社会を刺激するのかということなど考えにも及ばないのである。バーバラの場合あまりに成熟し過ぎていて現実性に欠けている。彼女は今まで三人の男と肉体関係があり一回墮胎の経験があるといっているが、まったくこの経験の影はない。彼女は苦しさを苦しさと感じない位成熟し物の理解ができています。彼女がレオに愛の告白をした時彼は自分の同性愛の経験を彼女に告白し、彼女とカップルになることに消極的だった。勿論彼も彼女のことが好きだったのだが、彼の中には人種的恐怖があり、それが彼をためらわせていた。しかし彼女の方は、彼の昔の経験をまったく問題にせず、むしろ若い時はよくあることだと是認する態度をとっているし、人種的恐怖も彼女の中にはほとんど生まれてこないのである。第四に、女の苦しみは、仮に描写されても、間接的に描写される傾向がある。その1つは、他人の口をかりて本人の苦しみを伝える方法である。レオナの苦しみはほとんど彼女本人から語られることはなく、ヴィヴァルドやキャスといった彼のまわりの人達から語られたり、ルーファスという彼女の相手が自分の苦しみを語る時一緒に彼女の苦しみも語るという方法である。もう1つは、ある人物による独白の中で女性の心の闘いも語られるという方法である。たとえば、バーバラはレオとの関係が深まっていくにつれて work shop の人達や街の人々の眼が気になりはじめたようだが、彼女の心の動揺はレオの独白の中で語られていく。すなわち彼女の心の動きを読者は感知することができない。第五に題材の選び方に問題があった。「同性愛」は題材としては選びまちがいであり、彼女達の心の闘いの行き先を封じることになっている。ボールドウィンが作家として登場人物に託すことは、問題に対峙し、葛藤し、普遍的方向に向かうことだ。たとえば、黒人の問題を単に黒人だけの問題にとどめることなく、人間全般の問題に普遍化する方向に向かわせることが狙いである。

だから彼は「自由」という問題を扱う時、黒人の自由の問題を考え方の自由の問題に、すなわち1つの既成の価値基準からの解放の問題につなげて考える方向に向かわせることで、問題の一般化、普遍化を目指した。しかしこの時、女性はどうしてもうまくこの問題に加わっていくことができない。その1つの理由は、今まで述べた4つの描き方により、彼女達の心の闘いは、彼女達の中で充分そしゃくできないことになってしまっているからである。たとえばキャスはエリックとの不倫の関係の中に今までの彼女の未熟さを乗り越えていくように思える。彼女は「解放されたのか」と思わせる。彼はエリックとの別れ際につぎのようにいう。

“you did something very valuable for me, Eric,... That was you gave me for a little while. It was really you.” (Baldwin 1962: 407)

今やっと分かったと彼女はいつている。しかしそれだけのことだった。何故かという、彼女には、結局、エリックと別れた後、タクシーに乗って、リチャードと子供のもとに帰っていくしか他に道がないからである。こういうことで、彼女とエリックとの関係は単なる情事に成り下がらざるを得ないのである。もう1つの理由は、「考え方の自由」を問う時に「同性愛」の許諾を題材として使ったことにある。これは女性にとってはあまりに厳しすぎる試練だといわざるを得ない。また仮にアメリカのように同性愛が公然とはばかられないにしても、女性のかかわれない問題であったことはまちがいないことだ。女性は傍観者としての立場にしか成り得ないからである。

VI お わ り に

今までの中で、ボールドウィンが黒人ということスタートとし、黒人の問題を黒人だけの問題にとどめることなく、人間の問題としてとらえようとしていたことが分かったし、女性もこのことに積極的にかかわらせようとしていたことが、女性の登場人物の主体的な活動ぶりなどから充分察知できた。しかし彼女達の活躍ぶりはキャラクターの面だけで、問題が普遍化される時になると、今までの女性に比べて控え目だった男性が中心になってくる。ボールドウィンの極めて活発な女性を生かすも殺すも彼次第だが、生かすとするなら、彼女達に与えられている「唐突さ」を軽減し、観念の問題に女性も入っていける道を開くことであろう。ボールドウィンは、こうすることで、作家としての命題である「人間の問題」に真に取り組むことができるようになるものと思える。

(1986. 9)

主 な 登 場 人 物

Go Tell It on the Mountain

	男	女
白人	祖父(解放後北部に逃亡)	祖母(南部にとどまる)
	ガブリエル	フローレンス(ガブリエルの姉)
	リチャード	エリザベス(ガブリエルの第二の妻)
黒人	フランク(欧州で戦死)	デボラ(ガブリエルの第一の妻・死)
	ロイヤル(エスタとガブリエルの子・殺される)	エスタ(ガブリエルの不倫の相手・死)
	ジョン(エリザベスとリチャードの子)	サラ(ロイの妹)
	ロイ(エリザベスとガブリエルの子)	ルース(ロイの妹)

Another Country

	男	女
白人	ヴィヴァルド	ジェーン(ヴィヴの女)
	リチャード	レオナ
	エリック	キャス
	エリス(演出家)	
	イーヴ	
黒人	ルーファス	アイダ
	ヘンリー(グレースの夫)	グレース(料理女)
	ルロイ(少年・エリックの相手)	

Tell Me How Long the Train's Been Gone

	男	女
白人	ピート(衣装係)	バーバラ・キング
	ソウル	ローラ
	ジェリー	マドレーン(女優)
黒人	ケイレブ	母
	レオ	ドロレス(妻)
	父	サリー(レオの一時的恋人)
	クリストファー	Miss ミルドレッド
	ファウラー	三人の姉妹(ケイレブ・レオの妹・死亡)
	マッシュウ	

If Beale Street Could Talk

	男	女
白人	ベル巡査 アーノルド・ヘイワード(弁護士)	ロジャーズ夫人
黒人	ファニー(22才) フランク・ハント(ファニーの父) ジョゼフ・リーヴァズ(ティッシュの父)	ティッシュ(19才) アリス(ファニーの母) シャロン(ティッシュの母) アーネスティン(ティッシュの姉) エイドリアン(ファニーの姉) シーラ(ファニーの姉)

(注) 表の見方

1. 男と女を結ぶ実線は男女関係を示す。
2. 男側の点線は同性愛関係を示す。
3. 女性側に□でかこってあるのは、本論中で取扱った、作品中の主要女性人物を示す。
4. *Go Tell It on the Mountain* には主要な白人の登場人物はいない。

References

- Baldwin, James. 1953 *Go Tell It on the Mountain*. Dell Publishing Co., Inc.
 _____ . 1955 *Notes of a Native Son*. Bantam.
 _____ . 1961 *Nobody Knows My Name*. Dell Publishing Co., Inc.
 _____ . 1962 *Another Country*. The Dial Press.
 _____ . 1963 *The Fire Next Time*. Penguin.
 _____ . 1968a *Tell Me How Long the Train's Been Gone*. Dell Publishing Co., Inc.
 _____ . 1968b *The Amen Corner*. The Dial Press.
 _____ . 1974 *If Beale Street Could Talk*. Signet Book.
- ボールドウィン, ジェイムズ, ニッキ・ジョバンニ (連東孝子訳). 1973 (和訳1977) *A Dialogue*(『われわれの家系』) 晶文社.
- Bone, Robert A. 1965 *The Negro Novel in America* (revised edition). Yale Univ. Press.
- 橋本福夫編. 1970『黒人文学研究. 黒人文学全集別巻』早川書房.
- Kinnamon, Keneth, ed. 1974 *James Baldwin: A Collection of Critical Essays* (Twenty Century Views). A Spectrum Book (Prentice-Hall. Inc.)
- 北村崇郎, et. al. 1973『黒人文学の周辺』研究社.
- Macebuh, Stanley. 1973 *James Baldwin: A Critical Study*. The Third Press (Joseph Okapaku Publishing Co., Inc.)
- 前川裕治, 1976『説教師の父を持って——J・ボールドウィン・ノート』長崎造船大学『外国文学思想研究』第2号.
- Maekawa, Yuji. 1979 "A Study of James Baldwin: An Introductory Sketch" 鎮西学院短大『紀要』第4号.
- Margolies, Edward. 1968 *Native Sons: A Critical Study of Twentieth-Century Negro American Authors*. J.B. Lippincott Co.
- O'Daniel, Therman B. ed. 1977 *James Baldwin: A Critical Evaluation*. Howard Univ. Press.
- Orsagh, Jacqueline E. 1977 "Baldwin's Female Characters — A Step Forward?" in Therman B. O'Daniel ed., 1977 *James Baldwin: A Critical Evaluation*. (Howard Univ. Press)
- Wright, Richard. 1940 *Native Son*. Penguin Book.